

[書 評]

Filip IVANOVIC

Desiring the Beautiful:

*The Erotic-Aesthetic Dimension of Deification in Dionysius the
Areopagite and Maximus the Confessor*

The Catholic University of America Press, Washington, D.C., 2019, pp. xiv + 250.

ISBN: 978-0-81323-189-1, 160 × 229 × 233.7mm, \$75.00

袴 田 渉

本書は、フィリップ・イワノヴィッチによる、ノルウェー科学技術大学人文学部哲学・宗教学科での博士号請求論文（2014年）が基になっている。彼は、モンテネグロの首都ポドゴリツァ出身の若手研究者であり、イタリアのポローニャ大学哲学部で過ごした期間に、ビザンツの哲学的伝統やギリシア教父思想に魅せられ、証聖者マクシモスの研究により学士号を、さらに偽ディオニュシオス研究を基に修士号を取得している。博士課程からはノルウェー科学技術大学に入り、教父哲学から文脈化神学に係わる幅広い研究領域をもつズィグルド・ベルクマンと、マクシモス研究の大家トルシュタイン・トレフセンに学ぶ。現在、ポドゴリツァ郊外に位置するドーニャ・ゴリツァ大学で准教授を務める。若手ではあるが既に多くの論文を発表しており、単著には本書の他に *Symbol and Icon: Dionysius the Areopagite and the Iconoclastic Crisis* (Eugene: Pickwick, 2010) があり、自身の編著作 *Dionysius the Areopagite between Orthodoxy and Heresy* (Cambridge Scholars Publishing, 2011) も上梓している。最近では、6～10世紀のビザンツと西方のキリスト教美術へのディオニュシオスの影響を考察する美学論集 F. Dell'Acqua, E. S. Mainoldi (eds.), *Pseudo-Dionysius and Christian Visual Culture, c.500–900* (Cham: Palgrave Macmillan, 2020) にも寄稿している (“Pseudo-Dionysius and the Importance of Sensible Things”, pp. 77–88)。彼はまた、自身の故郷であるポドゴリツァに非営利団体 Center for Hellenic Studies を創設し、自ら代表を務める傍ら、同団体の機関誌 *Akropolis* の発行も手掛けるなど多彩な活動を行い、近年多くの注目を集める気鋭の研究者である。

本書の目的は、ディオニュシオスとマクシモスのテキスト読解を通して、彼ら

の思想的核心をなす「神化」概念を解明することにある。ギリシア教父の神化概念については、20世紀半ばにV・ロースキイ (*Théologie mystique de l'Église d'Orient*, 1944) 等の仕事によって西欧に紹介されて以来、次第に研究テーマとして定着していき、現代のキリスト教思想界全体に見られる「原点回帰」の流れの中で、同概念の研究が、特に90年代から今日までに一つの大きな潮流をなすに到っている。本書もまた、そうした研究動向の中に位置づけることができるだろう。本書の特色は、「愛」と「美」こそが、ディオニュシオスとマクシモスの神化概念を理解する上で、共通して欠くことのできない契機であることを主張し、両思想家におけるこれらの契機の連関の比較検討を通して、同概念に迫ろうとする点である。著者による、愛と美、そして不死性(神性)という連関は、プラトンの『饗宴』と『パイドロス』(249D-252B)に依拠した極めて伝統的な着想である。しかしながら、これまでのディオニュシオスとマクシモスの思想研究において、同連関を通じて両者の神化概念に迫ろうとする、いわば美学的なアプローチは管見の限り皆無であった。無論、「愛の宗教」としてのキリスト教思想研究の枠内において、先行研究にあっても、両者における愛と神化の連関は何らかのかたちで問題とされてきた。しかし、美に救済的意義を認め、これを愛と神化との係わりの中で捉え直していく見方は、これまでの研究では見落とされてきた「古くて新しい」ものであり、そこにこそ本研究の独自性がある。こうした観点に立ち、著者は、両者それぞれのテキストを渉猟して愛と美の契機を精査し、これをもとに彼らの神化概念を考察することで、今日既に見失われて久しい、愛と美の救済的価値を現代において再評価しようとする。ディオニュシオスとマクシモスはまさに、愛と美とが、「人間」と「世界」それぞれの構成の核心にあるものであり、被造者どうしだけでなく、神と被造者、可知的なものと感じ的なのもの、目に見えないものと見えるものとを繋ぐ紐帯でもあることを明示した思想家たちであった。

本書は2部からなり、その構成は次の通りである。「序論」に次いで、第1部は「ディオニュシオス・アレオパギテース」として、第1章「愛」、第2章「美」、第3章「神化」と続き、第2部では「証聖者マクシモス」として、第4章「愛」、第5章「美」、第6章「神化」というように、第1部との対称的な構図のもとに考察が展開され、「結論：神化における愛と美」に到る。

以下に本書の内容を概観していくが、そこにはテキストに基づきつつも既成の解釈に留まらない、著者の斬新な読解が随所に散りばめられている。第1章は、A・ニグレン (*Eros och Agape*, 1936) におけるディオニュシオスのエロス理解への批判から始まる。ニグレンは、ギリシア思想に由来するエロスの愛と、キリスト教に由来するアガベの愛を切り離したうえで、ディオニュシオスにおける愛とはエロスであって、キリスト教的なアガベとは異なると解釈した。これに対し、

著者はテキストを引用しつつ、ディオニュシオスのエロスとはアガベの同義語であり、神が被造者を愛するというときも、人間が神を愛するというときも、等しくエロスという言葉が用いられることを指摘する。それは、単にディオニュシオスにおける愛のギリシア思想への近接性を示すだけでなく、その多面性、すなわち知性的、創造的、摂理的、相互的、そして還帰的側面をも示すという。そして、そうした多面性を貫くのは、愛の「脱自的」性質である。神であれ人であれ、誰かを、あるいは何かを愛する時、愛する主体は自己同一的な在り方を脱して、愛の対象に属し、相手と合一しようとする。さらに、そのような愛が成立する場となるのは、ヒエラルキア（位階）的に秩序づけられた世界においてである。この意味で、ヒエラルキアとは、神の愛の表現に他ならないと著者は主張する。

第2章では、ディオニュシオスの美の契機が問われる。そこにおいて指摘されるのは、彼にとって美とは、詩的・芸術的なそれを指すのではなく、プラトンによって追求されたような「美そのもの」であり、第一義的に神名としての美であること。さらにプロクロスの分有概念に依拠しつつ、通常厳密に区別されるはずの「分有されるもの（アイデア）」としての「美」と「分有するもの（被造的物）」としての「美しいもの」とが、一切の原因たる神において区別されない、という点である。このため、アイデア的神名の中で、ただ美のみが感覺的事物を通じて明らかに自らを顕現するのだという。そして、叡知的な領域に限定されることのない、身体・物質を含む万物に宿る「善なる美」によって、愛が喚起される。すなわち、善なる美は自らに向けて、被造者の「運動」を惹起するのである。なぜなら、ディオニュシオスの語源考によれば、美（κάλλος）とは、万物を自らのもとに「呼ぶ（καλοῦν）」ものだからである。このような美は、著者によれば、とりわけ儀礼において顕現する。それは、キリスト教の儀礼が、美の根源者たるイエスによって直接制定されたものだからであり、このような美を媒介として、被造者に神化が生起するのである。

第3章では、ディオニュシオスの神化概念が考察される。そこではまず、用語法の問題として、それまで同概念を表すのに主流を占めていた語「テオポイエーシス（θεοποίησις）」から、とりわけ彼に用いられて以降「テオーシス（θέωσις）」が標準的な術語として用いられるようになったことが指摘される。そこで重要になるのが、彼によって初めて「テオーシス」としての神化が定義されたことであり、そこに「神との類似」の問題が含まれていることであった。神との類似の問題系は、プラトン主義の思想的系譜に連なり、類似は神なる一者へ向けての知性的な上昇（還帰）によって果たされる。このことは、プロクロスの影響下にあるディオニュシオスの神化概念においても確かに当てはまるが、彼において強調されるのは、被造者側の知性の自助努力であるよりむしろ、神化の場面における神の主体性である。被造者の神化は、神の自己開示や創造時における

「神化する力」の賦与、さらに神からの働きかけといった要素が先ず有り、被造者がこれに応えるかたちで成立するからである。また、ディオニュシオスにとって、神化のための主要な方途は、儀礼に他ならない。ただし、単に儀礼を受けさえすればそれで神化してしまうのかといえば、そうではない。儀礼を通して発現する「神の働き」を受ける側にも、それに応答しようとする意志と働きが必要となり、この「協働」がなければ、神化は生起しない。そして、このような応答に際して、肯定神学と否定神学に基づく（これに象徴神学も加えるべきだろう）、神についての「認識」が本質的な役割を果たすことになる。著者は、ディオニュシオスにおける神化が、①知性的存在にのみ生じ、②各存在者の知的能力に応じて神化の度合いが異なる、と結論付ける。その上で、ここでの「知性的存在」が天使と人間のみを指すのではなく、「しかし感覚的なものについても、それが神の知恵の麗な反響であるといって誤りではないと思う」（『神名論』6章2節）というディオニュシオスの言葉を引きつつ、天使と人間以外の動植物や無生物を含む万物もまた神化されるのだとする独自の見解を示す。

第4章では、一旦ディオニュシオスについての論考を離れて、証聖者マクシモスへと移り、再び愛についての考察が開始される。マクシモスの愛についての議論は、情念論と修徳論を主要な舞台として展開しつつ、そこにおいて感覚的事物への「欲望（πόθος）」や「切望（ἔφρεσις）」、さらにあらゆる「情念の母」としての（利己的な意味での）「自己愛（φιλαυτία）」といった、いわば愛の頹落形態が分類される。そうした様々な情念的な愛欲については、最高の愛徳としてのアガペへの浄化・変容が目指されることになる。この頹落的愛から神的爱への上昇は、愛の範型としてのキリストの「人間愛（φιλανθρωπία）」への応答のかたちをとる。それは、愛を媒介とした、神の受肉と人間の神化の交換式を成立させる。このキリストを範型とする愛は、彼自身が教えた愛の掟、すなわち「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。……隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22：37-39）という二重の掟に極まる。その際、人間が神を愛するという時、それは人間が隣人なる他者を愛するという形をとることになるがゆえに、これら二つの愛は決して別々のものではなく「一つの愛」であることが強調される。このような愛の掟に従うことこそが、キリストに倣うことであり、神化という人間の救済への道となる。

第5章は、マクシモスの美の理解について考察がなされる。ディオニュシオスと異なり、マクシモスにおける美は体系的に扱われることはないながらも、著作中の様々な箇所においてディオニュシオス的な語彙に拠りつつ、やはり救済的な意義を孕んだ契機として言及される。このため、著者はディオニュシオスに準拠しつつ、マクシモスの全著作を渉猟して、美を表す三つの言葉、つまり「美（κάλλος）」、「麗しさ（ὡραιότης）」、「端整さ（εὐπρέπεια）」を取り出し、それ

ぞれの用例を吟味することで、彼の美についての理解を多面的な相のもとで考察している。彼において「美」とは、根源者たる神の美のことであるのみならず、神の諸々のロゴス（λόγοι）を通じて万物に与えられる、「神の似像」としての美のことでもある。それゆえ、美を求めることは、必然的に神を模倣し、善を行うことに繋がる。また、「麗しさ」とは徳に基づく実践的な生と、知恵と認識において真理を求める観想的な生との結合の中で生まれる、神への愛の内に見出される神的美をいう。これに対して、「端整さ」は、主として地上的な秩序の美を表す。それは創造主たる神の美の現れだが、それに捉われてはならず、魂は知性的・霊的な歩みを止めずに感覚的事物を越えて、神的な美へと到らなければならない。美と善、そして徳はここでは決して切り離されていない。

第6章では、マクシモスの神化概念について詳細な考究がなされる。彼にとって、すべての人間は神化する能力を生まれもつが、神化に到るかどうかは、神の恩寵にかかっている。ただし、すべてを神の働きに任せていけばよいということではなく、神化の実現には被造物の側からも働きかけが必要となり、ここにディオニュシオスと同様、神と被造物との「協働」の事態が要請されることになる。マクシモスは、被造物の在り方を「在ること（εἶναι）・「善く在ること（εὖ εἶναι）・「つねに在ること（ἀεὶ εἶναι）」に分類し、その上で、一番目を被造物の通常の在り方、三番目を神化した在り方として、さらに二番目を被造物の意志的な働きによって到達しうる在り方と捉え、これを神化に到るための重要な段階とした。意志的な働きとは、マクシモスによって「グノーメー（γνώμη）」という術語で表され、著者はこれを「自由な選択（προαίρεσις）」へ向かう「志向」ないし「意志」であるとする。グノーメーは、感覚や情念によって常に悪しき方向（神から離反する方向）へと陥る可能性にさらされていると同時に、自らに内在する自然本性としての「ロゴス」に依ることで、神へ向かう善き方向を志す可能性にも開かれている。この「善く在ること」の獲得という意志的な契機こそが、マクシモスにおける神化概念の特徴をなす。さらに、キリスト論の観点から、神の受肉を基礎とする人間の神化の成立という、教父思想の伝統に則ったマクシモスの神化理解が提示される。しかし、彼の思索は伝統的表現に留まらず、キリストが神性と人性を完全に併せもつとする「二本性論」の立場から、キリストにおける両性の「相互浸透的な在り方（περιχώρησις）」を主張しつつ、その在り方を人間における神化の内実にも適用していくのである。つまり、神化した人間においても、受肉のキリストと同様に、神性と人性が「混合せず、変化せず、分割せず、分離しない」仕方で共存しているという。また、キリストの受肉や人間の神化とは、神と人間の本性の理（λόγος）を変えてしまうものではなく、両性が係わり交流し合う仕方・方式（τρόπος）を変えるのだともいう。このようなマクシモスの主張の根拠となるのは、ディオニュシオスの「キリストにおける

神人的働き (θεανδρική ἐνέργεια)」という表現に他ならない。それは、神と人それぞれの本性の区別を保ちながら、働きにおいて相互に浸透し合い結び合うという受肉の在り方を表すものであり、マクシモスはそれをさらに神化の在り方の内実としても示してみせた。受肉とは、彼にとって、単に一回的な歴史的事実に留まるものではなく、徳や哲学的実践、観想を経て神の恵みを受けるに値する者に、不断に生起し続けている事態であり、それゆえに神化もまた絶えず起こり続けることになる。そして、そのような神化が生起するのは、神に呼び出された者たちが集う、ヒエラルキア的な場としての「教会」に他ならない。

結論では、これまでの個別の考察が総合され、ディオニュシオスの神化思想とマクシモスのそれが比較検討される。そこでは、エロス論における両者の立場の違いや、美の理念への強調の度合い、神化論における術語上の差異などを越えて、両者の神化を巡る思想の根本的な一致が確かめられる。それは、ディオニュシオスが顕示的にせよ潜在的にせよ、提起した問題系をマクシモスが継承し、何らかのかたちで展開させたものと見る立場である。そして、彼らが共通して主張した、人間の条件でありかつ神化の条件でもある、身体と物質的世界に美を認めて肯定し、これを愛し求める思想的態度こそが、物質的なものを通して精神的なものへと到ることを基調とする「ビザンティン美術」に反映されていくことが展望される。それは、8～9世紀の「聖画像破壊論争(イコノクラスム)」の思想的背景を研究の一つの基軸としてきた著者ならではの確かな結論である。

以上に概観した著者の論考は、多くの先行研究を踏まえつつ、緻密なテキスト読解に基づいてなされた堅実な労作であり、ディオニュシオスとマクシモスという二人の巨大な著作家の思想の核心へと読者を導く、確かな手引きとなるものである。ただし、著者のテキスト解釈における姿勢については、必ずしも「客観主義」的な、あたかも主観性を排したかのようなそれではなく、むしろ自身の正教徒としての抜き差しならない経験や価値観の込められた独自の視点から、両思想の調和的結合を読み解こうとするものであり、そのことを読者は本書の端々に感じ取ることができるだろう。しかしそれは、決して恣意的な読み込みではなく、自身の生における経験的要素と学問的論述との内的な結合を試みる著者の意思の表れであり、そのようなテキスト読解の姿勢が、抽象的な議論や理屈に終始しないアクチュアルな意義を本書に与えていることを見逃してはならない。本書が試みたのは、表題 *Desiring the Beautiful* に暗示されているように、私たちが生きる現実の世界に現れる具体的な「美しいもの (the beautiful)」への肯定と、日常に潜む一つひとつの美的経験(それは動名詞形 'desiring' で表された、美なるものへの愛求である)にこそ人間の救いへの突破口があることを、キリスト教の古典の読解を通じて示そうとするものであった。そして、その試みは確かな成功を収めている。彼が、教父学の大家アンドリュー・ラウスをして「初期キリスト

教哲学の若き研究者たちの輝ける星座を織りなす星々の一つ」と評せしめた所以である。